

太平洋戦争中の暮らし(後編)

先月号に引き続き、『太平洋戦争中の暮らし』の後編です。

今回も、市民の方2名からいただいた手紙を紹介しします。1人目は、幼少期を高知で過ごし、小学校から東京に住みましたが、高知に思い入れがあり28年前から土佐山田町でお住いの方です。香美市民にはあまり馴染みのない、学童疎開の経験を手紙で紹介していただきました。2人目は、香北町白川の五百蔵さん。戦時中の小学校時代を振り返ってくれました。

どちらも、戦争を実際に経験された方からの貴重な手紙です。戦争の経験を次の世代、未来へとへ引き継いでいていただきたいと思います。

※お寄せいただいた手紙は、なるべく原文のまま掲載しています。

匿名希望(土佐山田町、昭和11年生まれ)

そのころ東京の街中に住んでいました。食料は配給制で他は一切入手できません。ついに町中で、大釜でおかゆを炊いて配ることに。私も家族5人分が入るお鍋を持って並び、大釜でできたおかゆを大ひしゃくで汲んでもらい、大急ぎで帰宅したことを思い出します。町中でなければこんな光景は見られないでしょうが貴重な忘れられない経験になりました。

家は上野公園の近くにありましたがそこから疎開をして、杉並区へ。小学校へは家のうら戸から田んぼの道を進んで到着するところに。その家も空襲で全焼して、北陸の実家へ逃れたのでした。

『東京には子供は一人も住まないように』との政策で、家族が東京に残る家庭では、小学3年生以上の児童は、『学童疎開』をさせられた。私は長野県の南部にあるお寺へ4年生1クラス単位で。43名とともに国鉄の駅で降りたところからトラックの荷台へ。全員が一台に鈴なりになりデコボコ道をゆられゆられ山奥へ着いたところは山すそのお寺。その8月24日は記念日として毎月楽しんだ。冬の冷えはこたえた。6時起床、7時庭に整列して学校まで走る道路の凍り方、風呂屋さんからの帰り道にタオルがカチカチに凍ってパリパリ折れてしまうなどして同じ日本でもこんなに違うものかと、子供なりに感じるものがあつた。それでも人の情は温かく、今も近くのおばさんがなつかしい。寝起を共にした学友も。

◇学童疎開について詳細を手紙でいただきました◇

夏には稲穂が垂れはじめるので虫がたくさん飛び交っていた。そこへ私達は動員され、手をつかまえたイナゴを紙袋一杯に、お寺へ持って帰って戦利品のように渡すと、よろこばれ、すぐに料理されるのでした。東京の街中から来た子ども達なので、大騒ぎです。食べられた子はどれぐらいいたのでしょうか。私はダメでした。

冬も夏同様、六時起床、15分には寺の庭に整列し、学校まで駆足して白い息を吐きながら帰ってくる。凍りついた道路でも皆上手に転ばず走った。朝食後は、同じ飯台で国語、算数を勉強し、音楽の時間には軍歌も習って覚えた。

冬の暖房はこたつ。畳一枚分を掘りごたつにして二十人余りの子どもが足を入れていた。暖かくはななくとも楽しかった。

翌春、畑仕事が始まった。向かいの山を越えて少し行くと、桑畑が広がっていた。そこが、作業場だ。桑の木を皆で切り倒し、根を掘り起こし

平らにしてカボチャやさつまいろを植えるのです。それが終わると夏。その桑の根株をお寺まで運ぶ仕事が始まる。長く伸びたひげ根を肩に持ってひきずりながら汗だくになり、真夏の陽射しを受けても、さえぎるもののない山肌を、登り、下りしてお寺まで・・・子どもには過労でしたが口に出さず頑張っている最中、疎開8月24日記念日には特別の楽しみをと計画中に8月15日の『終戦』がきた。お寺から1きほどのところに川があり、そこへ洗濯物をゆすぎに行っていたときに『急いでお寺へ帰るように』と伝令があり、何があつたのかと帰ってみると、友達は皆、お寺の縁側にずらりと腰かけており、間もなく、天皇陛下のお声が「・・・耐え難きを耐え、忍び難きを忍び・・・」聞こえてきた。終戦の知らせである。言葉を出す者もなくそれぞれの続きをとり戻っていた。ごはんにはいつも大豆が入っていた塩味もありおいしかったが、その夜はいつものごはんが砂を噛むように泣きたくなった。みんなのいつもの賑やかな声もなく、ふしぎな夕食でした。

五百蔵利美(香北町白川、昭和9年生まれ)

出征していく人があると、必ず千人針を作った。『腹巻』である。白木綿に赤糸等で一針ずつ玉結びを縫いつける。一度に千人もいるわけではない。虎年の人はたくさん縫って千人に足す。虎は千里行つて千里帰ると云う諺がある。こうして出征兵士を送るが、勝ち戦の頃は日の丸の旗でバンザイバンザイで見送った。ところが戦況が悪くなってくると、いつ出征していったか分からないうちにいなくなっていた。これが国のやり方であった。

昭和九年生まれの者は、小学校入学の年から戦争が始まる。三年生を過ぎると学校から出征兵士の留守宅へ勤労奉仕に行く。勉強どころではない。

大人の女性達は毎日、竹槍の稽古である。自分達の学校行きの姿といえば防空頭巾と救急袋を肩にかけ足は藁ぞうり。

また、母親の農作業は大変だ。牛で田おこし、気の荒い牛は女性には強気で時々振り返ってくる。母は逃げる。そのたび牛をつかまえるのは近所のおちさん。



曙霞小学校4年生時のクラス写真
みんな『わらぞうり』を履いています

問 小学校生活は?

兵隊さんが学校の半分を使つて寝泊まりしていたので、私達は学校の半分しか使えず、下級生が午後に授業を受けて上級生が午後に授業を受けていました。授業以外は勤労奉仕を行い、畑をクワで叩いたり、麦踏み、稲刈りなどをしました。また、運動場の半分には芋が植えられていました。当時は、ともに授業を受けた思い出がありません。

問 食べ物不足していた?

実は、食べ物については困っていませんでした。田舎ではたくさん食べ物を作っていましたので、もちろん供出はありましたが、残ったもので十分に食えることができました。ただ、国からの通達で、お弁当は白米のみは禁止されていて、白米に麦を混ぜたものを持つていきました。また、週に1回は全校生徒お芋だけのお弁当の日がありました。

問 出征兵士の見送りは?

戦争が始まった当初、橋川の駅まで何度も出征兵士を見送りに行きました。二十歳前のお兄さん達で、良く知っている人も多くいました。出征のあいさつがとても立派で、若いのに兵士に選ばれたら立派になるんだなと感心したことを覚えています。

戦況が悪くなると、出征兵士たちの年齢も上がつていき見送りもなくなりました。知らないうちに、あの子のお父さんがいなくなったということもよくありました。

私の父も私が学校に行つている間に、満州へ出征してしまいました。

問 戦争が終わった時は?

8月15日、皆で天皇陛下の御言葉を学校の廊下で正座をして聞きました。

次の日、大栃方面から物部川沿いにやってきた真っ黒な米軍機が『日本が敗れた』というビラをばら撒いていきました。手を伸ばせば触れるのではと思うくらい低空飛行していたのを覚えています。最近でも米軍機が低空飛行していますが、それよりもずっと低く飛行していました。

大人たちはどう思っていたか分かりませんが、子どもの私にとっては戦争が終わってほっとしたというのが正直な感想でした。

戦争に関わる体験談など 随時募集しています

広報香美では、今後も戦争に関わる体験談やエピソードなどを随時募集していきます。

戦争体験者が少なくなる中、少しでも多くの体験が若い世代に引き継がれますよう、ご協力をお願いします。

問い合わせ・連絡先

香美市広報委員会事務局

電話 53-3112

メール kamikami@city.kamig.jp

住所 〒782-8501(住所記載不用)